

清沢満之 生誕150周年記念 シンポジウム

(2013年10月12日開催)



テーマ

にんげん

清沢満之ーその精神にせまるー

会場：大谷大学講堂

パネリスト：京都大学大学院教授 藤田正勝氏

大谷大学名誉教授 安富信哉氏

コーディネーター：大谷大学准教授 村山保史氏

清沢満之生誕150周年記念シンポジウム

(2013年10月12日開催)

パネリスト紹介・趣旨説明



コーディネーター
大谷大学准教授
村山 保史 氏

それでは、パネリストの先生方をご紹介します。
まず、お一人目は藤田正勝先生です。先生は一九四九年生まれで三重県のご出身。京都大学文学部卒業後、京都大学大学院文学研究科の博士課程を満期退学。さらに西ドイツのボーフム大学大学院の博士課程を修了されました。現在は、京都大学大学院の教授でいらっ

しゃいます。ご専門は哲学、日本哲学史です。先生は西洋哲学の観点から清沢を論じることのできる、数少ない研究者です。ご著書には、『若きヘーゲル』『現代思想としての西田幾多郎』『西田幾多郎―生きることと哲学―』『哲学のヒント』『西田幾多郎の思索世界―純粹経験から世界認識へ―』等があります。安富信哉先

生との共編のものとしては『清沢満之―その人と思想―』があり、法蔵館から出ている「現代語訳 清沢満之選集」の記者でもいらっしゃいます。

科准教授の村山保史と申します。よろしくお願いたします。

お二人目は安富信哉先生です。先生は一九四四年生まれで新潟県のご出身。早稲田大学の第一文学部卒業後、大谷大学大学院文学研究科の博士課程を満期退学されました。現在は大谷大学名誉教授、また真宗大谷派の光濟寺のご住職でもいらっしゃいます。ご専門は真宗学、とりわけ清沢研究では著名な研究者です。ご著書には、『親鸞と危機意識』『清沢満之と個の思想』『教行信証への序論―総序を読む―』『選択本願念仏集』私記』『親鸞・信の構造』『親鸞・信の教相』、そしてさきほど申しました藤田先生との共編の『清沢満之―その人と思想―』等があります。

本シンポジウムは大谷大学初代学長である清沢満之の精神にせまること、それを通じて、大谷大学がどのような大学であるのかを改めて考える機会にすることを目的としております。このシンポジウムを今日行うことについては、午前中に開学記念式典が行われましたが、本日十月十二日(実際には、十三日)は大谷大学の前身であります真宗大学が東京・巣鴨に移転開校された日であり、そのことを祝う日であるということがあります。そしてまた、本シンポジウムの全体テーマが示しておりますように、今年は清沢の生誕一五〇周年という年に当たっておりますので、本日、このようなシンポジウムを開催した次第です。

続きまして、第一部の基調講演に移ります。まず藤田先生、続いて安富先生に基調講演をお願いしたいと思います。藤田先生、よろしくお願いたします。

最後になりましたけども、私は本シンポジウムのコーディネーターを務めさせていただきます、大谷大学哲学

清沢満之生誕150周年記念シンポジウム
清沢満之—その精神にせまる—

第1部 藤田正勝氏による基調講演

倫理と宗教

—清沢満之の思索を手がかりに—



京都大学大学院教授
藤田 正勝 氏

ただ今、ご紹介いただきました藤田でございます。私は西田幾多郎の哲学などを中心に研究をしています。一九二七年に大谷大学で開催された清沢満之二十五周年追憶記念会、清沢が亡くなってから二十五年経って開かれた講演会ですが、そこに西田幾多郎が招かれまして、「犬儒学派エピクテートの思想について」という題で講演をしました。

エピクテートスというのは清沢満之にとつて非常に重要な人物であり、その思想から大きな影響を受けました。西田は、そのエピクテートスと清沢満之のつながりを取りあげて話をしたわけですが、そういう意味で私にとりまして間接的にはありますけれども縁のある大谷大学で、しかも清沢満之生誕一五〇周年を記念するシンポジウムにお招きいただきまして、大変うれしく思っています。主催の先生方に感謝申し上げます。

【キリスト教と倫理】

キリスト教における倫理、それから仏教における倫理、そういった問題から入って清沢満之の思索なりその精神、人間ということについて少し考えたいと思っております。

キリスト教におきましては「出エジプト記」に出てくる「十戒」が端的に示していると思えますけれども、律法といいますが、宗教上の命令とか掟、あるいは日常生活上の掟、あるいは倫理的な掟というものが非常に重要な意味をもっています。「十戒」のなかには「私の他に何者をも神としてはならない」という純粹に信仰に関わる戒めもございますし、「父と母を敬え」とか、あるいは「殺してはならない」「盗んではならない」という倫理的な戒めも含まれておりまして、キリスト教において倫理という問題が非常に重要な意味をもっていることが、このことからも知られます。

ただ、同じキリスト教でも旧約聖書と新約聖書に

おける律法の位置づけというのは大きく異なるということもいえます。ごく簡単にいつてしまえば、新約聖書では「愛」ということが強調されます。それを示すものとして、ヨハネによる福音書の言葉を引用しますと、「私は新しい戒めをあなた方に与える」



といわれています。従来の旧約聖書の戒めとは違う戒めを自分は考えているということなのです。どういう内容の戒めかといいますと、「互いに愛し合いなさい。私があなた方を愛したようにあなた方も互いに

愛し合いなさい」というものです。それがキリスト教を貫くいわゆる隣人愛という精神になっていくわけです。そこからも倫理の問題がキリスト教において重要な意味をもっていることがうかがえます。

【仏教がめざすもの】

それに対して仏教では、そのめざすところはやはり涅槃ということになると思います。「ニルヴァーナ」という言葉はもともと「吹き消すこと」、つまり煩惱を吹き消すことを意味しました。世俗の世界あるいは世界のなかで感じるさまざまな煩惱から離れ、それを滅するということがめざされました。そうした場合考え方は大乘仏教になりますと「空」という概念で表現されますが、いずれにせよ世俗と距離を取って煩惱を滅することに重点が置かれ、倫理ということが積極的には問題にされませんでした。そのためにキリスト教の側から、仏教の特質として、倫理に対する非積極性が指摘され、批判されました。

【仏教への批判】

その一つの例に、アフリカのガボンで現地の人々の医療活動に携わった、「密林の聖者」といわれるシュヴァイツァーが書きました『キリスト教と世界の宗教』という著作がございます。そのなかで仏教についても触れていて、仏教の特質について「仏教では生成と消滅の循環」、これはいわゆる輪廻のことですが、ものが生まれそして消え去っていく生成と消滅の循環のなかに生じるすべてのものが苦悩に満ちているという、苦悩として現実世界をとらえるところに仏教の特質があるということを書いています。それは「一切皆苦」という言葉からいえると思います。たしかに現世を苦の世界としてみるという世界観が仏教にはあります。そして、その苦の世界から抜け出すためには、現実から距離を取って純粹な精神性、まったくの無為、つまり何もなさないといういい方をしてもいいかと思いますが、無為という生き方をするによってはじめてその苦の世界を

脱することができるといえるかあるかと思えます。そういう点にとくにシュヴァイツァーは注目して、仏教においては人倫的な意志、道徳・倫理に関わるような意志というものが生まれてこない、あるいは社会のなかで実践をしようとする情熱も生まれてこないという厳しい批判を、この『キリスト教と世界の宗教』という著作のなかで行っております。

【仏教と倫理】

たしかにそういうふうにいえるところがあるかと思えますが、しかし、仏教においても倫理がまったく無視されていたわけではないという反論も十分できると思えます。その一例として、仏典のなかでも最も古いものの一つといわれています『ダンマパダ』、つまり『真理のことば』のなかに出てくる言葉も、シュヴァイツァーに対する反論の一つの根拠になるかと思えます。そこに「すべて悪しきことをなさず、善いことを行い、自己の心を浄めること、——これが

諸の仏の教えである」という言葉が出てまいります。たしかに仏教においては自己自身の救済ということに重視され、他者との関わり、例えば困窮する人へ手を差し伸べるというキリスト教的な隣人愛、あるいはカリタスというような精神が前面に出ていないことはいえると思います。あくまで自己自身の救済ということが中心に置かれます。その救済のために必要な真理(ダールマ)を把握するための智慧ということが非常に強調されるわけですが、他方、仏教ではまた慈悲ということも非常に大事な概念として考えられているということもいえます。

【慈悲】

これもまた最古の仏典の一つでありますけれども、『スッタニパータ』のなかで、「あたかも、母が独り子を生命を賭してまもるように、そのようにいつさいの生きとし生けるものどもに対しても、無量の(慈悲みの) ところを起こすべし」という言葉がござい

しかしながら他方、倫理、例えば生きるものを殺さないという不殺生、あるいは他者を愛せよという隣人愛、そういったことがそのまま宗教なのではない。倫理がそのまま宗教ではない。両者は深く関わっているけれども、しかし同一ではないということがいえます。

そうしたときに宗教と倫理がどう関わっているのか、あるいはどう関わるべきなのかという問題は非常に難しい問いであって、いろんな人がその問題についてこれまでも取り組んできてはいるわけですが、必ずしもこれが正解だという形で答えが出されていくわけではありません。しかし極めて重要な問題であることは間違いないと思います。今も申しましたように、宗教が成り立っていくために倫理という側面をその内にもたなければならぬということから考えましても、両者の関係をどう考えていくのかということとは極めて重要な問題であって、多くの倫理に関わる人、あるいは宗教に関わる人がそういった

ます。一般にいわれますが、仏教においては智慧と慈悲というものが、いわば車の両輪となってその信仰を支えています。そういう意味で、倫理というものが仏教においてもやはり重要な意味をもっているといえます。もちろんシュヴァイツァーは非常に重要な点を指摘していると思います。しかし、それに対して反論をするということも可能なのではないかと考えています。

以上申しましたように、キリスト教においても仏教においても、例えばモーセの十戒や仏陀の五戒が示しますように、宗教と倫理というのは深く結びついています。両者を切り離して理解することはいけません。宗教と倫理と私では考えています。宗教というのは倫理的な側面をその内にもつことによつてはじめてその信仰を軸とする共同体を維持していくことができるのであって、倫理への関わりなしに宗教というものは成り立っていかないといつてもいいでしょう。

問題について深い思索を巡らせてきたわけです。清沢満之もそういう人の一人であったということができると思います。

【清沢における「倫理と宗教」の問題】

清沢満之の場合、一九〇一年に浩々洞という信仰共同体ができ、そこで弟子の人たちと『精神界』という雑誌を刊行いたしました。そのなかで清沢は多くの論稿を発表しています。それを読みますと、道徳と宗教という問題が非常に大きな問題として彼に意識されていたことがわかります。たしかに清沢は自分の立場をいい表すために、例えば晩年の日記である『臘扇記』のなかでも「絶対の信任たのむ」という言葉を使っています。自らの信仰の立場を、絶対無限者という哲学的な表現を使って、絶対無限者へのまつたき依存、「信任」という言葉でいい表しています。また、そういう立場に立つときにはすべてを絶対無限者に委ねるのであり、自分自身に引き受けるべき

責任はないということ、つまり無責任ということ、主張しています。そのためにしばしば道徳や倫理を軽視しているという批判がなされました。

しかし、その問題を考えなかったわけではなく、非常に重要な問題としてこの倫理と宗教の問題を考えていたということが、『精神界』という雑誌に発表されたさまざまな論文から読み取ることができま

【清沢の精神主義】

この道徳と宗教、あるいは倫理と宗教という問題は清沢自身にとって純粹に信仰に関わる問題でしたが、それは同時に明治時代の政治にも深く関わる問題でありました。一八九〇年に教育勅語が發布されますが、その翌年、内村鑑三の不敬事件が起こります。明治のはじめから神道が国教化されていき、それを踏まえて、明治の中頃になりますと、東京大学の哲学の教授であった井上哲次郎らが国家道徳とい

をしました。その一人である境野黄洋という人は清沢の思想を「羸弱思想」——「羸弱」というのは衰えて弱っているという意味ですが、現実の世界から身を引いてただ自分の内面における満足を求めるような主義、立場であるという批判を行いました。このような批判に対して清沢は、宗教的な信仰というのは現実の世界での活動基準といえますか、倫理あるいは善悪といった基準を超越したものであって、宗教と倫理というものを同じレベルで並べてその関係を論じることとはできないという反論を行いました。そのことを清沢は「宗教的信念の必須条件」という論文のなかで、「倫理を超越したところにはじめて宗教的な信念の広大な天地が開かれてくる」と表現しました。あるいは別のところでは、「自分の立場は超倫理説である」と、つまり倫理というレベルを超えたところに信仰の立場があるということを主張しました。

うことを強く主張するようになりました。そしてそういう立場から宗教——キリスト教や仏教が批判されました。そのような圧力を受けて仏教教団も教団を維持するために、仁義忠孝という儒教倫理をそのまま受け入れたり、あるいは国家が推し進めていく対外膨張政策をそのままの形で追認するというふうになっていきました。清沢はそういう時代の流れ、圧力に迎合することを拒否し、宗教というのは決して倫理を補完する、つまりそれを補うためにあるのではなくて、どこまでも自己の精神の安住といえますか、精神の自在な活動を求めるところに宗教のめざすものがあるということを主張しました。それがいわゆる清沢の精神主義です。

【清沢批判と清沢の反論】

そうした主張に対しては仏教者からも批判がありました。例えば、当時、仏教清徒同志会（のちに新仏教同志会）というグループの人たちが盛んに活動

【清沢の真諦と俗諦の理解】

それは、清沢が亡くなる直前に書きました「宗教的道徳（俗諦）と普通道徳との交渉」という論文のなかでの主張にも関係してきます。仏教、とりわけ真宗では真諦と俗諦、つまり究極の立場での真理が真諦であり世俗の世界での真理が俗諦であります。この真諦と俗諦、一般に「真俗二諦」というふうにいわれますけども、その問題に触れて今申しあげた宗教と倫理の問題について論じています。清沢の真諦と俗諦の理解の特徴は、俗諦というものを私たちが日常の世界でいいますところのいわゆる道徳とは違うものだ、両者をはっきり区別した点にあります。俗諦と私たちの現実の世界における倫理的規範というのはもちろん重なるわけですが、倫理においてはさまざまな規範といえますかルールを実現する、それを実現するために努力するということにその意義があります。それに対して、俗諦というのはそのような観点からみられるべきものではなくて、ま

さに規範を実践しようとしたときに自分自身の無力さ、有限性を自覚するという、そのために絶対無限者に目を向けるという、そこに俗諦が果たす役割があるのだという考え方をしたわけであります。簡単にいいいますと、道徳につまずくという、そのことによつて信仰の世界というのは開かれてくるのだという考えを清沢はもっていました。

清沢が亡くなる直前に書きました「我信念」という文章がありますが、その文章を読みますと清沢自身の歩んだ道というのがまさにそういった道であったといえますか、清沢自身、道徳につまずいた人であったことがわかります。清沢はそのつまずきから立ちあがつて信仰の道を歩んだ人でありました。

そういう点で私は、清沢という人は宗教とは何かという問題、信仰とは何かという問題を深く考え、その本質を非常によくつかんでいた人だと考えておられます。それと同時に、時代の圧力に屈したりとか、あるいは時代におもねったりとか、そういうことを

しますと、宗教はたしかに善悪を超越したところに成立するものであります。しかしそれは宗教が現実の世界における私たちの生、私たちが生きるということ、そしてそこから必然的に生じてきます倫理の問題というものからまったく切り離されているということを意味するものではないという点です。むしろ善悪というものが問われる地盤があつてはじめて、親鸞の言葉ですが「善悪のふたつ総じてもつて存知せざるなり」という言葉が語られる境地というものが開かれてくるのではないかと考えています。つまり信仰者もまた宗教的な生のかにだけではなくて、同時に倫理性というものが問われる世俗の生のなかにも身を置いているわけであります。

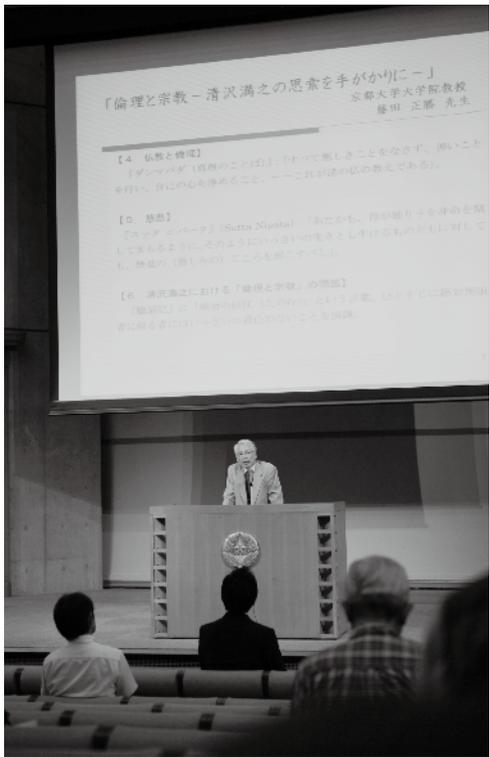
一方で、たしかに清沢がいいますように信仰自体は善悪の次元を超越したところに成立するにしても、しかし信仰者もまた世俗の生のなかでいかに行為するのかという問題から

一切することなく宗教とは何かという問題を的確にとらえて、その信仰の立場に踏みとどまった人であつたと考えております。宗教的な信仰の世界というのは世俗的な道徳とは違った次元に成立するものであるということを真に理解していた人であつたと考えています。

【残された課題】

清沢満之の弟子に曾我量深という方がおられます。大谷大学の第十七代学長を務められた方ですが、曾我量深が清沢の生涯を振り返つて、清沢の思索の中心に道徳と宗教の問題があつたこと、その違いを明らかにすることに清沢の思索が向けられていたことを指摘しています。まさにその通りであつたといえると思います。

そういう点で私は、清沢の宗教理解というものに深く共感をするわけでありますが、一言、つけ加えておきたいと思います。それはどういう点かといひ解放されているわけではありません。そこに倫理と宗教という問題に関わる最も難しい問題があると私は考えています。そしてその点に関しては、清沢においても十分に問われることなく困難な課題として残つたのではないかと思うわけであります。そしてその困難な課題は私たち、現代に生きる私たちに委ねられているということができないのではないかと考えています。



清沢満之生誕150周年記念シンポジウム
清沢満之—その精神にせまる—

第1部 安富信哉氏による基調講演

清沢満之と真宗大学

—その精神を尋ねて—



大谷大学名誉教授
安富 信哉 氏

ただ今、藤田正勝先生から「倫理と宗教—清沢満之の思索を手がかりに—」という題目で大変に貴重なお話をいただいたところでございます。先生には、倫理の側面から鋭い形で清沢満之の精神といえますか思想を問い直していただいたと思います。

【はじめに】

—誠の一字に貫かれた生涯—

清沢は宗教的人間であるわけですが、同時に優れて倫理的な人間であったと思います。その生涯におきまして清沢をかけがえのない師と仰いだ暁烏敏という方がいるのですが、その方がこういうことをおっしゃっているんです。

「先生が尤も好まれし文字を求むれば、それ誠の一字か。而して先生の歴史は、この誠の一字にて貫かれたりとはいふも愚かならんか。……終始一貫名の為にあらず利のためにあらず、誠を以て道の為に尽されしは、先生を知る者の誰しも拒む能はざる事実

也」、とこのように回想しております。

私が清沢の著述を読んで受ける感銘の一つは、まさにこの「誠」を生きた人であったというところがございます。一九〇三年、明治三十六年の六月六日にその命を終えるわけですが、彼の院号、そして法名は「信力院釈現誠」でした。この院号である、「信力院」というのは信仰の力に生きた宗教的人間という、そういう意味において信力院と。同時に誠を体現した倫理的人間としての「釈」、つまり仏弟子としての現誠、誠を現すと、そういう法名でございます。この法名はどなたがつけられたかよくわかりませんが、これも、清沢の一生を見事に集約した名であるところ、こういうふうに思います。

誠という価値を非常に彼は大切に、その誠というものは誠実であり誠意である。さらに端的に申せば、真心（まごころ）ということでございますが、その真心をもって周囲の人びとと交わったことが思われます。その誠を尽くした生涯の最後の仕事に、

この大谷大学の前身であります真宗大学の開学がございませう。

【真宗大学開校】

— 立ち処の明確化 —

真宗大学はもとが京都にあったのですけれども、これを東京に移して一九〇一年、明治三十四年の九月、清沢は真宗大学学監、今でいえば学長の地位に就任いたします。そして十月十三日、その移転開校式が巣鴨の新しい校舎で挙行されたわけですが、これについて大学の主幹で同時に清沢の補佐役でもあった関根仁応という人がいるのですが、関根は「仏前礼拝、勅語捧読ならびに挙式の辞（学監代予）」と、こう日記に記しております。ここで注意されるのは、「仏前礼拝」、「勅語捧読」でございまして、さらに挙式の辞は「学監代予」——学監に代わって私が読んだということだと思っております、と記されています。

清沢の教育理念からすれば教育勅語の捧読という



は他の学校とは異りまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於て浄土真宗の学場であります。即ち我々が信奉する本願他

力の宗義に基きまして、我々に於て最大事件なる自己の信念の確立の上に其信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽すべき人物を養成するのが本学の特質であります」と、このように述べております。

「自信教人信の誠を尽すべき人物」、これを養成するのだと、それが本学の特質なんだと、こういつています。「自信教人信」という語はあるいはなじみがない言葉かもしれませんが、「仏道の真実を自ら信じ、そして人に教えて信じしむる」という、これは中国唐の善導という方の言葉ですね。もちろん大学は学問の府で知性が大切にされるわけですが、清沢

のは奇妙な印象を与えるわけですが、これは当時の教育体制のもとでは一般的な事柄であったと思えます。まして、政府の役人あるいは各界の名士が来賓に来ているわけです。そのなかにはさきほどお話にあった井上哲次郎もいたかと思えますけれども、そういう式では清沢はこれを容認せざるをえなかったのだらうと思っております。

南条文雄の回想によれば、最初は清沢が捧読の予定だったのですが「私には不得意なところがある」といって、南条に代読を依頼したといわれます。うがった見方かもしれませんが、これは清沢における教育勅語の消極的な忌避ではないかと思えます。そこに彼の一つの立ち位置というものがうかがえるのではないかと思います。

— 「自信教人信の誠を尽すべき人物」の養成 —

真宗大学開校の辞で彼は教育の理念について、みなさま方はよくご存知の言葉でございませうが、「本学

は教育理念の根本に、仏教によって宗教的な精神性の豊かな人格、人物を養成するのだということを置いたわけであります。

【仏教を世界へ】

— 新都東京で —

人間の誠を生み出す根源を清沢は仏教に求めて、仏教の伝統に基礎づけられた人間の精神性をかけがえないものとししました。当時の日本は、文明開化、そして富国強兵という国の方針がございまして、前へ前へと進む積極主義を標榜したわけですが、しかし物質中心の世のなかになって人間の宝である精神性というものが軽んじられることにもなりました。そういう国の玄関となる東京で清沢は『精神界』という雑誌を出し、「精神主義」を唱え、その教育的な実践の場として真宗大学の開校に臨んだわけです。彼の門弟の一人に安藤州一という方がおりますが、安藤は「先生曰く……積極主義の沸騰点に達せる東

京市中に在りて、消極主義を唱導することは是なり。是れ炎塵中の氷柱なり、世豈此の如き快事あらんや」と、このように回想しております。

—世界第一の仏教大学—

清沢は真宗大学をいわゆる宗門大学という狭い枠に閉じ込めないで、世界に開かれた仏教の大学として構想し、その遠大な抱負として「この大学は世界第一の仏教大学たらしめざる可らず。他日、欧米より仏教を学ばんがために日本に留学するものあらば、必ず先づ真宗大学に来るべし」と、このように語っております。世界第一の仏教大学、これを構想していくうえで清沢が本邦随一の仏教学者として尊敬した人が南条文雄でございます。

—南条文雄への尊敬—

南条は一八七六年、明治九年に留学生として英国のオックスフォード大学に参りまして、そして困難

ななかでマックス・ミュラーというサンスクリット

の学者のもとで梵語を学んで、世界ではじめて

梵語の無量寿経を出版いたしました。この南条に

ついて清沢は「先生曰く、南条文雄師は、それ洪鐘

の如き人か。…若し人、就いて之を敲かば、胸中の蘊蓄、殷々として洪鳴を

発す」と賞賛しております。南条は清沢の去つた後、真宗大学第二代の学長になります。真宗大学、そしてやがて大谷大学になっていくわけですが、先輩の間では、この大学は清沢満之を父とし、南条文雄を母とすると、そういうことがいわれております。清沢、南条、そしてやがてそこから佐々木月樵という偉大な、建学の精神を体現した第三代学長が出てきたわけでございます。



【心霊の修養】

—パンの問題—

清沢は真宗大学に、自信教人信の誠を尽くす世界第一の仏教大学という大学像を描いておりましたけれども、しかし現実には学生が、三〇〇人ほどであったかと思われましても、遠大な志を欠いていることを大変に悲しんでおりました。「余が、真宗大学の前途に就て憂ふる一事は、学生に遠大の志望乏しきこと是なり。徒らに成功を急ぎ、漸やく卒業の期に達せんとすれば、早くもパン問題に奔馳す。是れ修養の足らざるに依ると雖も一は亦遠大の志なきが故なり」と、こういうふうにご語っております。

ここに「修養」という言葉が出てまいりますけれども、修養というのは心のもち方・対人行動に気をつけ、他人の人格を重んじ、自分の人格を高めることといわれますが、そういう意味で修身・養心——身を修め心を養うということ、つまり人倫交際、倫理性というものを養っていくことです。修養というのは明

治時代に重んじられた価値観でございますが、修養を重んじる清沢は同時に遠大な志を非常に大切にされた人でした。したがって清沢は厳格主義的なりゴリストという一面はありますが、しかし同時に遠大な志を抱いたロマンチストという側面もあった人だと思われまします。『臘扇記』の日記等を読みますとそういう遠大な志というものも同時にうかがわれるわけですが、自らそのなかでは修養を大切にしている日常生活のなかでこれを実践していきました。

—真宗大学の学生へ—

そして一方、学生たちにも『無盡燈』の誌上に「心霊の修養」と題する講話を連載して、その大切さを語りかけております。「自ら修養の足らざるものにして、此の如き題目を標して語らんとするは、嗚呼のことなれども——ここでの「嗚呼のことなれども」というのは誠にお恥ずかしいことだという意味だと思っておりますが、「思い出たる儘に、題目を立て、見

聞やら経験やらを取り交へ、少しく語る所あらんとす」と「心霊の修養」という連載の講話の冒頭で語っております。「心霊」という言葉は現在ではほとんど使われない言葉だと思いますけれども、辞書等引くと、一般的に魂とかあるいは不可思議な心的な現象というような意味が出てまいります。清沢においては精神性という意味としてみることができないのではないかと思います。

— 修養論の波紋 —

数年前に清沢とその門下の人々、つまり曾我量深、金子大榮、そして安田理深というそういう四人のいわば近代精神史を彩った真宗の学匠たちでございませぬけれども、その方々の論集、アンソロジーがニューヨーク州立大学出版部から英語で出て、そのタイトルが *Cultivating Spirituality* でございました。「カルティベイト」という英語はご存知のように「耕す」という意味です。同時に「養う」とかあるいは「教

化する」、そういうのがカルティベイトの意味でございますが、清沢においてはとくに「精神性を養う」ということを修養と呼んで若い人たちに伝えております。

「精神主義」の名で呼ばれる清沢の修養思想は社会的にも、心ある人びとにある波紋を呼んだようでございます。例えば明治で私たちがよく知っている夏目漱石という作家がおりますけれども、この夏目漱石の『吾輩は猫である』を読んでも、この夏目漱石の『吾輩は猫である』を讀んでおりますとこういう一節がございます。「心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出来るのぢやないかしらん。僕なんか、そんな六づかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義許りがいゝと思ふのは少々誤まつて居る様だ。……最後の珍客は消極的の修養で安心を得ると説法したのである」。その作品のなかで八木独仙という四十歳前後の哲学者が出てまいりますけれども、その哲学者の名を借りて清沢の消極主義について、あるいは精神主義について語って

いるように思われます。夏目漱石の蔵書目録を読みますと、清沢の『信仰座談』、さきほどの安藤州一が編集したものですけれども、それが彼の蔵書目録に入っておりますので、そういうものを通してながら漱石は清沢に触れたのではないかと思われれます。

【心霊の開発】

— 無一物の師、無邪気の弟子 —

そしてこれは教育論にもつながってまいりますけれども、清沢が精神性を耕すうえで重視したのが問答法、そして思索です。この問答法というのは歴史をたどると、これは藤田先生のご専門になるのですが、哲学者のソクラテスに源を発するわけです。清沢はソクラテスの問答法、いわば対話的方法を大切にいたします。例えば、このようなことをいっております。「ソ氏（ソクラテス）が青年教育を以て主眼となせしは敬服に堪えざる所なり。……而して、其教育の方法に於て、問答の手段に依れること、自家

無一物の態度を取れること、問題を日常卑近の事物に寓せること、は、実に開發的教育の妙施設と感服の至りなり」。開發的教育の方法は問答の手段によるということでございます。当時一般的であった注入的——上の方から注入していくような、そういう注入的な方法、その傾向を批判しております。

またこれと関連いたしましたして、思索、つまり考えることを非常に重んじております。清沢は学生時代に哲学を専攻したことはご承知の通りですけれども、哲学は明治になって西洋から入ってきた学問で、この哲学を通してものを考えるということを学ぶとともに、内観思惟という仏教の伝統にも帰っていくこととなります。清沢には学生時代から亡くなるまで多くの日記が残されております。一般に日記といえれば日常生活の備忘、メモランダムというふうな意味をもつのが普通ですけれども——もちろんそういう意味もありますが、そのような性格と異なって清沢の日記はとくに日常生活の思索の記録でございます。

常に考えるということを目標として生きたことではないかと感じます。

— 思索(シンキング)の重視 —

清沢にとつて哲学とは「哲学する」という動詞でございました。そしてそれは思索するということと一つでありました。宗教とかあるいは信仰といえ、思考停止、考えることを止める、そして信ずるといふそういう硬直した状態を指すかのようにみなされることも少なくないのですが、しかし清沢においては宗教とか信仰というのはまったくそうではありませんでした。これについては興味深いエピソードが伝えられております。ヒュース女史という人が、「先日、真宗大学に来訪し、種々の調査を成して帰れり。……女史曰く、一日の授業時間幾何ぞ、余曰く、一日も授業をなさず。女史曰く、五ヶ年の間一日も授業をせずして果して何事をか成す。余曰く、唯シンキングを成すのみ。女史大ひに驚て曰く、……五ヶ年間、

さきほどから何度も引用してあります安藤州一は「当時先生、愛児の行末を顧慮し、殆んど情に堪へざるものゝ如く、顔色沈鬱、亦多くを語り給はざりき。其夜九時、洞の門を出で給ふ」と、そのように記しております。清沢は相手を思いやる心を同情と呼んで人倫交際上の要件といたしておりますけれども、今の一節には学生を思いやる清沢の心情がにじみ出ております。

以上、教育者としての清沢満之の姿をたどってみました。

— 教育者・清沢満之の意義 —

清沢の肖像がこの講堂に掲げられておりますけれども、何かしら厳めしい印象を与えます。現実的に厳しい人であったことはもちろんでございますけれども、しかし学生あるいは他の方々と接している姿をみてみますと、いわゆる親鸞聖人の御同朋・御同行という精神をもって接しておられたのがわかり

シンキングのみを成すの学校は未だ是れあらざるなり。我れ東洋に於て今日始めて是を見ると」。こういうふうに英国の女史は驚いたということ伝えております。この場合に思索の立脚地は仏教でございます。ただ仏教の思想を中心とするわけですが、仏教以外の思想も自己と世界を照らし出す鏡として積極的な意味をもちました。そのような広やかな思索が、清沢が学生たちに勧めた方法でした。

【おわりに】

— 大学を去る —

一九〇一年、明治三十四年九月に真宗大学に就任して以来、わずか一年ほどで清沢は真宗大学を辞することになります。真宗大学の学生たちは関根仁庵主幹の排斥運動を起こしました。その責任を取って清沢は失意のうちに辞任したわけでございますが、健康の悪化という問題も大きくありました。清沢がその宿舎である浩々洞を去る当日の様子について、

ます。その学生に対する清沢の態度について、清沢満之の研究者であり、また本学の学長であった寺川俊昭氏は「当時、国民教育の全面にわたって、『教育勅語』による徳目の強調が貫かれていた。また一方には、キリスト教の『清潔な倫理』が青年たちに強い感化をおよぼしていた。それらに対して清沢は、仏教の信仰に基く独自の人間観と倫理を、また如来を信ずる心に由来する価値観を、青年の人間形成の不可欠の規範として、広やかな視野で構想し、諄々と語っていったのである」と述べておられます。誠にごもつともな指摘であると思えます。



第2部 質疑応答

村山 第二部は、二つの部分に分けたいと思います。まず、パネリストの先生方同士で、それぞれの講演をお聞きになったうえで質問等がございましたらお聞きいただけます。それが終わりましたら、会場のみなさまからいただきましたアンケートの質問にお答えし、こちらと会場のみなさんとが対話をする形にしたいと考えております。では、藤田先生から安富先生への質問等ございましたら、よろしく願います。

【パネリスト相互の質疑応答】

藤田 安富先生のご講演をお聞きして、清沢満之という人が何をめざしてこの大谷大学という大学をつくろうとしたのかということがよく理解できました

なことを私自身も教えられて今日に至っているわけですが、一つはやはり「考える」ということだと思います。いってみれば、私自身、考えるということが非常に苦手だったわけですが、ものを通してということ、そしてものを話すときには「自己を通してものをいう」と、そういったことを先輩方から教わりました。同時に、私がこの大学に入ったときには大



学では清沢満之のいわば浩々洞の伝統を引く諸先生がご健在でして、例えばさきほどの藤田先生のお話のなかにも出てまいりました曾我量深という方は清沢が大切にした「自覚」と

た。そこでとりわけ、安富先生は「自信教人信」というところにこそ大谷大学の特徴があると、清沢が真宗大学開校の辞のなかで語っているということをご紹介くださったわけですが、そういう点や、あるいはパンの問題というおもしろいエピソードもご紹介くださいました。また、そこで遠大の志あるいは遠大の志望ということを強調されて、いわばそういう清沢の考え方が大谷大学の建学の精神として連綿と受け継がれてきたことをお教えくださいました。安富先生ご自身、長年に渡って大谷大学で教鞭を執られたわけですが、そういう清沢の考え方というものが、具体的に安富先生が教鞭を執られていた時代にどういう仕方を受け継がれてきたのかということについて、一言、お言葉をいただければと思います。

安富 清沢がこの大学の学祖として先輩から語り継がれてきており、その清沢満之を通していろいろいうことを「内観」という言葉で大切にされましたし、またそれを受け継いだ金子大榮という方は「聞思」ということをおっしゃって、また、ものをしゃべるときには必ず自己というものを問うていきなさいとおっしゃいました。問うということが「自覚」の問題であり、「内観」の問題であり、親鸞聖人の教えに聞いていく「聞思」であるという、思索の伝統ということを大学で学ばせていただいたように思います。

村山 安富先生から藤田先生にご質問がございましたら、よろしく願います。

安富 藤田先生は西田幾多郎の研究者でもおられるわけですが、清沢満之と西田幾多郎——西田が清沢をどのようにみたのか、とくに倫理的な側面で何か清沢から示唆を受けたようなことがあったのか、ということについて教えていただければと思います。

藤田 西田幾多郎は若い頃に生きるうえでのさまざまな悩み面に直面しました。そしていろんな書物に当たって、例えば聖書の「いかに思わすことでも自分の背丈を一寸チたりとも伸ばすことはできない」というような言葉から深い示唆をえたりしました。あるいは禅に非常に傾倒していましたので熱心に参禅をしたり、浄土真宗関係の書物をたくさん読んだり、例えば当時大谷大学から出ていました『無盡燈』という雑誌を読んだりしました。同時に清沢満之の書いたものからも大きな刺激を受けたことを、清沢が亡くなったときに日記に書いています。どのように生きていくのかという指針をおそらく清沢のいわゆる精神主義というものから学び、それを自分自身のものにしていったのではないかと考えています。

それともう一点、安富先生は自分自身で物事を考える重要性を、ヒューズ女史の話を手がかりに「シンキング」という言葉で表現されましたけれども、

【会場からの質問への応答】

村山 では、続きまして会場からの質問をお受けしたいと思います。まず安富先生への質問です。「明治に生きて清沢が宗教的寛容についてどのように考えていたのかということに興味があります」とのことです。

安富 清沢は自己に厳しい人であることは申すまでもないことでありますけれども、しかし外のことに対しては非常に寛容といえますか、いわゆる内蔵外寛ということがいえるのかも思います。だからお弟子さんにもいろいろ個性的な方を輩出しました。

例えばさきほど申しましたけれども暁烏敏という青年がおりました。藤田先生がお話しくださったこととございますけれども、清沢が倫理以上ということとをいって、それでさきほど羸弱思想とか倫理軽視というような言葉も出ましたけども大きな反響を呼

それとつながることがあります。西田幾多郎の哲学のなかで何が重視されたのかといいますと、やはり自分自身で考え、自分の哲学をつくりあげていくことでした。当時すでにヨーロッパで流行しているいちばん新しい哲学を紹介するということが哲学者の役割であるかのような風潮が生まれていたわけですが、それは現代にも続いていると思いますけれども、そういうことをしてはダメなのだ、と。むしろ長く伝えられてきた古典をしっかりと読み、そしてそこから「生きて出る」ことが大切なのだということとを強調しました。西田は、自分自身の頭で考えるということをして、はじめて哲学というヨーロッパから輸入された学問が日本に根づくのだという信念を非常に強くもっていた人でした。そのことはさきほどの「シンキング」と結びついています。そういう意味で、学問に対する考え方という点で相通するものがあつたといえるのではないかと考えています。

んで、世情の批判を一面に浴びます。そしてそのことで世間から問われていたとき、東大の総長だった加藤弘之という人から、精神主義の倫理についての考え方がもう一つわからないから教えてくれといわれます。その際に、自分の身体の調子が悪いということとで暁烏を遣いに出すんですね、暁烏に代わりに行ってもらいますということ。しかし暁烏は自由奔放なこと——倫理以上ということで、かなり乱暴なことまでいっていたのですけど、それに対して清沢は「あなたもずいぶん思い切ったことをいいますね」と伝えたそうです。清沢は暁烏を咎めるということはずいぶん、むしろその後、自分の手で文章を書き、そして彼が主張していた精神主義の本意を説いていくという形を取っております。当時、新宿に内村鑑三がおり、本郷には清沢満之がいたのですが、内村はかなり厳格主義で、それに対して清沢は寛容的といえますか、そういうところが清沢の態度であつたかと思われれます。

村山 次に藤田先生に質問です。「キリスト教と仏教を混同するわけではないのですが、似たような側面があるものとして「愛する」ということがあるように思える。そもそも「愛する」とはどのようなことでしょうか」という大きな質問です。

藤田 「愛するとはどういうことか」というのは大きすぎて私も答えにくいのですが、さきほど申しましたように、清沢の「宗教とは何か」という問題に対する答えというのは、「宗教というのは倫理あるいは善悪という基準が論じられるレベルを超えたものである」という考えにあると思います。それはたしかにそうだと思います。しかし最後に、そうであっても信仰者が現実の生のなか



にいる存在として倫理の問題を問わなければならぬということを示しあげたわけです。そのときに何が倫理なのか、どうすることによって私たちは倫理というものをつくりあげていくことができるのかという問いの前に立たされているわけですが、その問いに対してどのように答えるのかという問題につながっていると思います。そのときに私自身は、倫理を支えているいちばん根本のところにあるのは、一言でいえば「人間の尊厳」ということになると思います。一人ひとりがかもっているかけがえのない価値ということですね。そういうものがあつてはじめて倫理というものが成り立っていると考えるのですが、そのかけがえのない価値をもった人、よくいわれます社会的な弱者とかも関係なくみな同じようかけがえのない存在として生を受けているということになると思いますけれども、そうしたかけがえのない存在を大切に思うということが愛といえるのではないかと、質問をお受けして考えました。

村山 手元にあるアンケートには慈悲というのはどういうものかという質問もいくつかあるのですが、今お答えいただいたこととつながっていると思います。続いて安富先生には「キリスト教が「清潔な倫理」という形で青年たちに強い感化をおよぼしていたのはなぜですか」という質問があります。

安富 キリスト教の清潔な倫理というのは、当時の若い人たちにとっては非常に魅力的だったのではないかと思います。明治の倫理観を支えた大きなものとして封建倫理、儒教的な倫理がごいます。例えば男性というものに女性は従うべきだとか、人間同士の対等な関係が必ずしもつくられていない。そういうようななかで、仏教で真宗以外の僧侶の肉食妻帯ということは厳しく律せられていたわけですが、一八七二年になりますと、政府は肉食妻帯畜髪も許すという方針をとります。この政策はある面においては廃仏毀釈につながってくるような、仏教

界がある面で墮落させようとする側面もなかったとはいえないと思うんです。そして多くの僧侶もそれを受け入れていった。そういうなかで、同じ宗教としてあつても、仏教の方はどうも僧侶たちが墮落しているような感じがする。それに対して植村正久とか海老名弾正とか内村鑑三というようなキリスト教の人たちが非常に大きな感化力をおよぼします。そこにはやはりキリスト教特有の人間を平等にみているということのような倫理が顕著にある。そういう意味において、封建的な倫理に染まってきた人たちが、とくに若い人たちにとっては新鮮な響きを与えた。浩浩洞が開かれるわけですが、田辺元という人が自分の回想で、浩浩洞が開かれたけれどもキリスト教に惹かれてやはりキリスト教に行ってしまったとおっしゃっていますよね。それは当時の新しい西洋のものの考え方、人間に対する一つの倫理観——お酒を飲まないだとか、あるいはタバコを吸わない、とくにピューリタニズムが入ってくる。ピューリタニ

ズムは清教主義ですから、若い知識人の方にはとくにそうだったと思うんです。仏教も清潔にいかなくればいけないというので新仏教主義という運動が起こってくるんですが、これは「仏教というのは倫理だ」というところまで極言していきます。仏教者が山にこもって社会に関わらないで一人で自分の安心を求めていくというふうなあり方というのは果たしてどういうものだろうかという疑問から新しい仏教運動が起こってきた。仏教清徒同志会の人たちで『新仏教』という機関誌を発行します。彼らは自分たちを「仏教清徒」といつているんですね。清徒というのはピュリタンです。たしかに、仏教に対してキリスト教のほうが青年の心をとらえる清潔感があつたんじゃないだろうかと思われます。

村山 続いて藤田先生に「自分自身の無力さということは神という超越した存在があつてのみ成立するのでしょうか」という質問です。

とに表れているわけですけども、そういう人間がもっている努力の限界、壁のようなものに、必ずしも絶対無限者を想定しない場合にも、つまり倫理的な目標をめざして可能な限りの努力をすることで、もぶつかることがあると思います。

村山 藤田先生への質問でしたが、安富先生にもお答えいただいでよろしいでしょうか。有限者の自覚というのが絶対無限者を立ててのみ成立するのか、ということですか。

安富 有限あれば無限なかるべからず、というのが清沢の基本的な考え方だったと思います。有限を自覚するということはいわずとも背景に無限というものを想像するからだ。有限と無限の二つを同時に考えていくというのが清沢の考え方で、とくに清沢のものの考え方の背景に真宗の基本的な考え方があるように思うんですね。一つは「機法二種の深信」

藤田 もちろん、神といえますか、清沢の言葉でいいますと「絶対無限者」という存在を前にして自分自身の無力さとか卑小さとか有限性とかを強く意識することもあるわけで、そういうことを前提に今のご質問があると思います。私自身はそういう絶対無限者を立てなくても自分自身の有限性というものに突き当たることがあると考えています。それは清沢自身が歩んだ道でもありました。清沢は道徳というものを完全な形で実現する倫理的な生き方をした人であつたといえますか、そういう問題をいちばん大切な問題として考えていた時期があつたと思います。しかしそのためにいかに努力してもいいですか、清沢の場合でいいますと、禁欲生活というものをしています、食べるといふことも可能なかぎり制限をしてごくわずかなものしか口にしない生活をしたわけですが、そういうことをどこまでもやりながらそれを実現しきれない。それは実際に結核にかかって療養しなければならなかつたというこ

といわれるものでございます。機(人間、自己)というものは有限であると、法(真理、仏)というものは無限であると。南無阿弥陀仏も南無は有限であつて阿弥陀仏は無限であるということにおいて、有限と無限の一致ということを南無阿弥陀仏の上に見ていく。『歎異抄』等の根底には、機法二種の深信といわれるものがある。そういったことをとくに清沢満之の場合には自らの有限性の自覚、命だとか能力だとかあるいは知力——何事においても自分には限界があるという。そういうなかで有限なる自己がどうして立っていくことができるかということ、無限者(如来)に依らざるべからずという形で無限との一致というか、そういうところに自己の信念をもっていく。そのような彼の宗教的な自覚が最終的に明らかにされたのが「我信念」であると思います。

村山 少し別のタイプの質問に移りたいと思えます。「清沢満之は当時の社会問題とか戦争に対してど

のような関係をもったのでしょうか。実際に国家とどのように関わるべきだと考えていたのでしょうか」というものです。安富先生を中心に答えたいいただくのがよいかと思えます。



安富 清沢満之は何かある事件についてこう考えるとか、直接的な言葉で語ることが少ない人だと思えます。ただ、よく読んでいくと背後に社会的な問題が隠されていると思うんですね。例えば、精神主義というと「万物一体」という考え方がありません。空気だとか太陽だとか水だとかはすべて自然の恩恵であるということを「万物一体」という論文のなかでいっている。そこでは直接には言葉に出していないのですが、背景に渡良瀬川

なっていますけども、平和的な文明を希求するんだということ。「他力信仰の発得」のなかでいっています。戦争とか競争は悪である、戦うのは良くないというようなことを、青年たちに対する講話とか、いろいろなところでいっております。その言説の背後にある社会的な問題、これを私たちは読み込んでいくということが必要なんじゃないかと思えます。

藤田 『精神界』という雑誌に発表したものですが、清沢は「宗教的信念の必須条件」という論文を書いています。そのなかの「超倫理説」という考え方に通じるものですが、宗教とは何かという問題を論じた箇所がございます。「宗教的天地に入ろうと思ふ者は形而下の孝行心も愛国心も捨てねばならぬ。その他仁義も道徳も科学も哲学も一切眼にかけぬようになり、ここにはじめて、宗教的信念の広大な天地が開かる」ということを述べています。宗教という問題を彼がどう考えていたのかをよくみて

流域における足尾銅山鉍毒事件があるといわれます。直接には足尾銅山鉍毒事件がどうだとはいってないんですけども、背後にそれがあって万物一体、私たちは太陽の恵みを受けて水の恵みを受けて空気もなくて生きられないという存在の相対性、関係性を指摘しているところがあります。このようにいろいろな言葉、言説をみていきますと、背後に何かいろいろなものがある。例えば「我信念」のなかに「人生不可解」というところで如来を信ずることを惹起じきいたしました」と。清沢は一九〇三年六月六日に亡くなるわけですけども、その二週間ほど前に「人生不可解」という言葉を残して亡くなった青年がいるわけですよ。それに対して自分は、不可解だから死ぬのではなくて不可解だから如来を信じることを惹起したと、そういう言葉で表している。具体的に言及しているわけではないんですけど、発言の背後にその事件があるんじゃないかと、そう考えないわけにはいかない。戦争については、日露戦争の前に亡く

取ることができると思えます。そのことに対する私の共感ということもさきほど申しあげたわけですが、しかし同時に、そのうえで倫理の問題をどう考えていくのか、そこから国家に対してどのような態度をとるのかという問題が出てまいります。孝行心という言葉が出てきましたが、それはさきほどの愛の問題にもつながってくると思えます。自分の周りにおける他者、キリスト教であれば隣人愛ということですが、他者の関わりというものを積極的に考えていくわけですが、他者への関わりをどう考えるのかという問題が、今の「宗教とは何か」という問題と合わせて深く考えていくべき課題として私たちに与えられているのではないかと考えています。その点が、清沢満之では必ずしも十分深められていなかったと感じます。ある意味では清沢がやり残したこの問題を私たちが引き受けて私たち自身の問題として考えていく必要があるのではないかと考えています。

村山 では、最後の質問とさせていただきます。「現在の大谷大学は、清沢満之のめざした大学に近づいているのか。大谷大学生として私たちがすべきこと、心がけるべきことはどういうことなのか」という質問です。

安富 大谷大学が清沢満之の願いに近づいているのかということでございますね。私が大学に入ったのが一九六〇年代の後半でございましたけれども、そのころは大学にいても清沢満之ということをしなくても大声でいえなかつたんですよ。そういうことをいうとみなさんから怪訝けげんに思われるかもしれないですけども。何かしら「清沢満之」といえなかつた雰囲気があつたのも事実です。もちろん曾我量深、金子大榮という清沢直門の方々が健在でございましたけれども、私は真宗学が専攻でしたが、真宗学の先生方のなかにもあるいは学生の中にも清沢満之を話題に取りあげると、「清沢満之はもう古い」とい

的なことだと思えますけど、現代という時代がある方が「空虚な自己の時代の到来」というふうに、自己が空洞化してしまったということをいっています。これは日本全体の現象となつている。学内的な意味だけでなく、改めて清沢満之が現代において重要になつてきている。そのことを忘れてはいけないのではないかと思えます。大学から『無盡燈』という同窓会の冊子が出ておりますけども、その巻頭に大学を退職された方々のインタビュー記事が毎回載っています。そのほとんどの方が「建学の精神を大切にしたい」とおっしゃいます。最新号(二〇一三年九月二十八号)ではノーマン・ワデル先生がそのことをおっしゃっています。ワデル先生はこの大学のご出身ではないのですが、この大学におられて禅の思想や鈴木大拙の研究をずっとしておられた方です。その方がそういうことをおっしゃって、「ああ、やっぱりこの大学で学ばれて、私たちに願いを託されているんだな」と感銘を受けております。

われて、「親鸞聖人はもつと古いんじゃないですか」と思わずいってしまうこともあります。そして清沢満之の命日の法要である臘扇忌も大学主催ではできなくて、学生の自主的な主催で行っていました。ところが今は、臘扇忌を大学主催でやるようになった。清沢満之の評価、学内での共通理解がある面が出てきたと思います。ただ、学内の共通理解といつても学生たちが清沢満之を読むということがなかなか難しくなつてきている。明治という時代は遠くなくなつてきておりますし、清沢の文章も遠い。だから、私たちが学生のころに本居宣長を読めなかつたように、今の学生は清沢満之を読めない。大学は大切にしてあるんだけど、学生たちのなかでいっしょに問題を共有していくことができないところがあるように思います。そういう意味で、清沢満之の現代語訳を試みておられる藤田先生の「現代語訳 清沢満之選集」は大変ありがたいことだと感謝しております。また、自己を問うということは清沢満之の最も基本

【シンポジウムの総括】

村山 藤田先生、安富先生、ありがとうございます。では、最後にシンポジウムの総括をさせていただきます。今回、両先生にはそれぞれの立場から清沢満之の精神にアプローチしていただきました。藤田先生には宗教と倫理の關係に焦点を当てていただきました。倫理と宗教はどうしても同じものではないですね。倫理は「悪人は悪人である」という世界で、宗教は「悪人であっても救われる」あるいは「悪人であるからこそ救われる」ということがいえる世界だということになります。しかし同時に、それらは別々のところにあるというのではなくて、人間は倫理と宗教という二つの円によつて囲まれるような形で生きていかねばならないということがある。一人の人間のなかで二つの領域がせめぎ合っているということがあるわけです。清沢はそれを強く自覚して生きた人だったわけですが、そうしたせめぎ合

の自覚が強ければ強いほど、宗教の意識は際立ってくるというのがある。せめぎ合いのなかで生きた宗教家としての清沢の精神、そこから出てきた私たちにとっても切実な問題を藤田先生は明らかにしてくださいました。安富先生には、清沢がどのようにして真宗大学の建学に関わったかということに焦点を当てていただきました。真宗大学の開学までにはさまざまな経緯があったわけですが、真宗大学の建学の理念ないし精神を分析するという形で、そこに表現された清沢の精神を明らかにしてください。その意味では、宗教教育家としての清沢の精神を示していたのだと考えております。

私は最初に、このシンポジウムをなぜ本日開催するのかを説明いたしました。そもそもなぜこのシンポジウムを開催したのかについてはまだ十分には説明しておりません。このことについて最後に説明したいと思えます。さきほど、安富先生は明治が遠くなって清沢の書いたものを読みにくくなったと

究をすることになりました。そういう意味でかなり開かれたというふうにはいえません。しかしさきほど安富先生もおっしゃったように、全集に収録された清沢の文章はやはり非常に古いものですので、これを読むというのはなかなか難しい。そのようなことがありますので、誰にでも読める形、単に宗門関係者だけでなく、研究者だけでなく、はじめて清沢の文章に触れた一般の方でも読めるような形というのがもともとと望まれていくのだろうと思っております。

みなさまのお手元にあるかと思いますが、『文藝春秋』のコラムは、清沢の思想をできるだけ多くの全国の方、予備知識のない一般の方に読んでいただけることを願って毎月書いておるものです。このシンポジ



おっしゃいました。これは現実問題としてあると思えます。そういうことがあって、藤田先生も清沢が書いたものを現代語訳して下さって私たちでも読みやすい、学生たちでも読みやすいものにして下さったということがあったわけです。清沢研究というのはいくつかの段階がありまして、みなさんご存知のことかとは思いますが、今村仁司という方がおられました。この方は清沢の全集が岩波版になることに尽力された方ですけども、この方の有名な言葉に、清沢は「宗門内ではウルトラ有名人、宗門外ではほとんど忘れられた思想家」というのがあります。清沢の思想に強い関心をもたれた今村さんは、そういうことがあっては困るというので、清沢の思想を新しい全集にされました。最初、清沢の思想というのはやはり宗門内の研究者が専門的研究の対象とするものだったわけです。幸い、大谷大学のスタッフが中心になって岩波版の全集というのができまして、これで関西のみならず全国の研究者が清沢の研

ウムについてもさまざまに告知をいたしましたのは、学内の学生だけでなく学外の方にもお越しいただきたかったからです。今回のシンポジウムは採録して、『朝日新聞』に掲載されたインタビュー記事、『文藝春秋』のコラムと合わせて冊子化いたします。この冊子を配布して、若い学生や一般の方々に清沢という人間に興味をもってもらえることを願ってこのシンポジウムも企画したのです。冊子が発行されましたらお目通しいただければ幸いです。本日はお越しいただきましてありがとうございます。これもちまして、清沢満之生誕一五〇周年記念シンポジウムを閉会いたします。